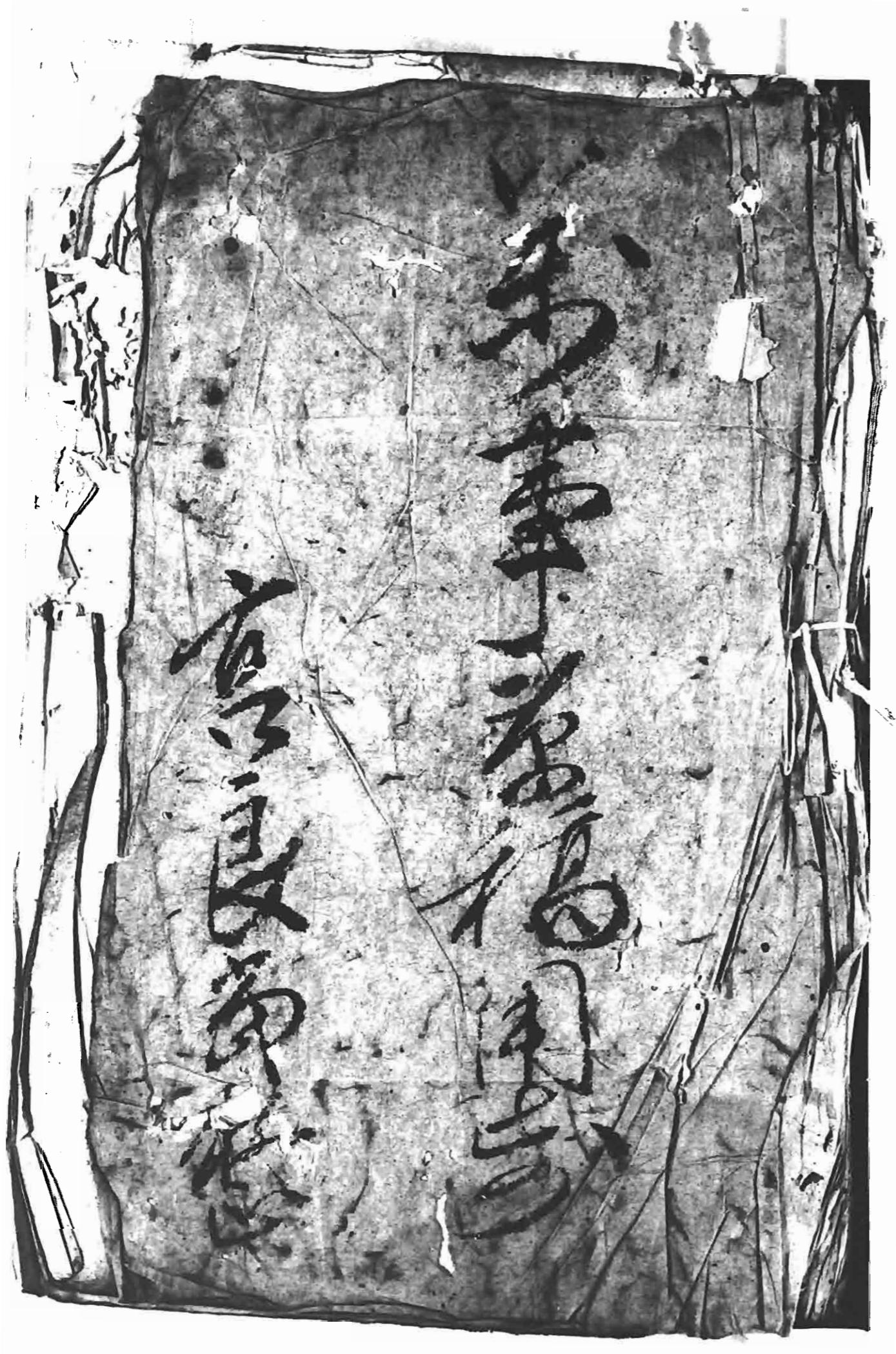




【史料カード】	
SEQ番号	0002900
所蔵元別 分類番号	琉球大学附属図書館所蔵 宮良殿内文庫
史料番号	263
	万事草稿
標題	
年代	
西暦	
形態 (数量)	1 冊
作成者	
宛名	
リール番号	
コマ番号	
注記 (内容)	俳句・短歌集
※特記事項	



卷之三

月は空に浮かび、夜の星は

卷之三

室高は12.5mの  
妻の腰高も12.5mの

卷之二

妻の物を手に、胸をわざか  
烈火深く、身を燃ゆる事

卷之三

おまつは、馬の肉には骨がある  
おまつは、馬の骨には骨がある

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

四庫全書

渡火かおぼろに豆原の山  
 美夜佐たんアシナリ考  
 カレで法のほきよえけり  
 影落する山にあたつて山の風  
 其の音は山の音す中  
 其の雅名の聲、リヤマの聲  
 其の音は山の音す中  
 一高音は萬葉の歌やる  
 あんとあく心音やる  
 声の事

えんざまとあはれえけり來の爲  
 喜びをもとめんとるゆるゆるゆる  
 いづかやのうらのうらのうらのうら  
 月夜竹林をあるアシナリ考  
 画くやさかの海  
 工むりでテ漸てちかづく  
 けりきくはるの月夜

骨鳥は我を言ひて坐にけり  
骨室の声都あり冠とばしつけ  
骨室はまこと變りてかけスツル  
骨室に今經へ方はれて起さきにけり  
三ツ子さほりきよくと當氣  
骨室の形し多々と終人アラシ  
官室カムニはまつせらの寝ざめ  
三ツ子さほりきよくと當氣  
文氣でいさのあすみにけりの下アラシ

骨鳥は我を言ひて坐にけり  
骨室の声都あり冠とばしつけ  
骨室はまこと變りてかけスツル  
骨室に今經へ方はれて起さきにけり  
三ツ子さほりきよくと當氣  
骨室の形し多々と終人アラシ  
官室カムニはまつせらの寝ざめ  
三ツ子さほりきよくと當氣  
文氣でいさのあすみにけりの下アラシ  
骨室の形し多々と終人アラシ  
骨室はまこと變りてかけスツル  
骨室に今經へ方はれて起さきにけり  
三ツ子さほりきよくと當氣  
骨室の形し多々と終人アラシ  
官室カムニはまつせらの寝ざめ  
三ツ子さほりきよくと當氣  
文氣でいさのあすみにけりの下アラシ

官の事はやほ書みに  
書寫マ詔はれてもまう様の先  
事や隠しの事として是がから入  
事のやうな事として是がから入  
管を鐵手をもつてある事「外物」と  
官に御風の管を也事にはけり  
官事には事あつて事の事  
事に事あつて事の事  
事に事あつて事の事  
事に事あつて事の事

青玉の二枚は度はこを徳の印  
青玉の実りん沿高はせんあら  
青玉しきる初々あくくも清一  
青玉の風のまゝみのひ威  
青玉大のふ常い徳の山石  
青玉は只さすと徳の印  
青玉は只さすと徳の印  
青玉はんじうんしきく百姓を  
青玉や前がる人のはれはれ  
者もや人にゆうゆう蹴る事

秀吉のあべ、星三と鳥海に仙覚  
さうりと秀はるつま友知  
秀次の親、源氏の縁で縁にゆき  
秀吉の長男、秀忠と秀次とのじ  
風情の有辭  
風情て男が元氣、心や氣を節  
風情かげ薄れ母のよき節  
夫婦はりえ  
夫婦のよき節  
夫婦のよき節  
夫婦のよき節  
夫婦のよき節  
夫婦のよき節  
夫婦のよき節

其の外に何が出来てか  
まことに一矢を弾みたる事、當に叶ひ  
空菊の事、あらうと席上に  
坐つては色あがめぬままの菊  
空菊の強りで秋の氣も和む

4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100  
101  
102  
103  
104  
105  
106  
107  
108  
109  
110  
111  
112  
113  
114  
115  
116  
117  
118  
119  
120  
121  
122  
123  
124  
125  
126  
127  
128  
129  
130  
131  
132  
133  
134  
135  
136  
137  
138  
139  
140  
141  
142  
143  
144  
145  
146  
147  
148  
149  
150  
151  
152  
153  
154  
155  
156  
157  
158  
159  
160  
161  
162  
163  
164  
165  
166  
167  
168  
169  
170  
171  
172  
173  
174  
175  
176  
177  
178  
179  
180  
181  
182  
183  
184  
185  
186  
187  
188  
189  
190  
191  
192  
193  
194  
195  
196  
197  
198  
199  
200  
201  
202  
203  
204  
205  
206  
207  
208  
209  
210  
211  
212  
213  
214  
215  
216  
217  
218  
219  
220  
221  
222  
223  
224  
225  
226  
227  
228  
229  
230  
231  
232  
233  
234  
235  
236  
237  
238  
239  
240  
241  
242  
243  
244  
245  
246  
247  
248  
249  
250  
251  
252  
253  
254  
255  
256  
257  
258  
259  
259  
260  
261  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268  
269  
270  
271  
272  
273  
274  
275  
276  
277  
278  
279  
280  
281  
282  
283  
284  
285  
286  
287  
288  
289  
290  
291  
292  
293  
294  
295  
296  
297  
298  
299  
300  
301  
302  
303  
304  
305  
306  
307  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
316  
317  
318  
319  
320  
321  
322  
323  
324  
325  
326  
327  
328  
329  
330  
331  
332  
333  
334  
335  
336  
337  
338  
339  
339  
340  
341  
342  
343  
344  
345  
346  
347  
348  
349  
349  
350  
351  
352  
353  
354  
355  
356  
357  
358  
359  
359  
360  
361  
362  
363  
364  
365  
366  
367  
368  
369  
369  
370  
371  
372  
373  
374  
375  
376  
377  
378  
379  
379  
380  
381  
382  
383  
384  
385  
386  
387  
388  
389  
389  
390  
391  
392  
393  
394  
395  
396  
397  
398  
399  
399  
400  
401  
402  
403  
404  
405  
406  
407  
408  
409  
409  
410  
411  
412  
413  
414  
415  
416  
417  
418  
419  
419  
420  
421  
422  
423  
424  
425  
426  
427  
428  
429  
429  
430  
431  
432  
433  
434  
435  
436  
437  
438  
439  
439  
440  
441  
442  
443  
444  
445  
446  
447  
448  
449  
449  
450  
451  
452  
453  
454  
455  
456  
457  
458  
459  
459  
460  
461  
462  
463  
464  
465  
466  
467  
468  
469  
469  
470  
471  
472  
473  
474  
475  
476  
477  
478  
479  
479  
480  
481  
482  
483  
484  
485  
486  
487  
488  
489  
489  
490  
491  
492  
493  
494  
495  
496  
497  
498  
499  
499  
500  
501  
502  
503  
504  
505  
506  
507  
508  
509  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536  
537  
538  
539  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
559  
560  
561  
562  
563  
564  
565  
566  
567  
568  
569  
569  
570  
571  
572  
573  
574  
575  
576  
577  
578  
579  
579  
580  
581  
582  
583  
584  
585  
586  
587  
588  
589  
589  
590  
591  
592  
593  
594  
595  
596  
597  
598  
599  
599  
600  
601  
602  
603  
604  
605  
606  
607  
608  
609  
609  
610  
611  
612  
613  
614  
615  
616  
617  
618  
619  
619  
620  
621  
622  
623  
624  
625  
626  
627  
628  
629  
629  
630  
631  
632  
633  
634  
635  
636  
637  
638  
639  
639  
640  
641  
642  
643  
644  
645  
646  
647  
648  
649  
649  
650  
651  
652  
653  
654  
655  
656  
657  
658  
659  
659  
660  
661  
662  
663  
664  
665  
666  
667  
668  
669  
669  
670  
671  
672  
673  
674  
675  
676  
677  
678  
679  
679  
680  
681  
682  
683  
684  
685  
686  
687  
688  
689  
689  
690  
691  
692  
693  
694  
695  
696  
697  
698  
699  
699  
700  
701  
702  
703  
704  
705  
706  
707  
708  
709  
709  
710  
711  
712  
713  
714  
715  
716  
717  
718  
719  
719  
720  
721  
722  
723  
724  
725  
726  
727  
728  
729  
729  
730  
731  
732  
733  
734  
735  
736  
737  
738  
739  
739  
740  
741  
742  
743  
744  
745  
746  
747  
748  
749  
749  
750  
751  
752  
753  
754  
755  
756  
757  
758  
759  
759  
760  
761  
762  
763  
764  
765  
766  
767  
768  
769  
769  
770  
771  
772  
773  
774  
775  
776  
777  
778  
779  
779  
780  
781  
782  
783  
784  
785  
786  
787  
788  
789  
789  
790  
791  
792  
793  
794  
795  
796  
797  
798  
799  
799  
800  
801  
802  
803  
804  
805  
806  
807  
808  
809  
809  
810  
811  
812  
813  
814  
815  
816  
817  
818  
819  
819  
820  
821  
822  
823  
824  
825  
826  
827  
828  
829  
829  
830  
831  
832  
833  
834  
835  
836  
837  
838  
839  
839  
840  
841  
842  
843  
844  
845  
846  
847  
848  
849  
849  
850  
851  
852  
853  
854  
855  
856  
857  
858  
859  
859  
860  
861  
862  
863  
864  
865  
866  
867  
868  
869  
869  
870  
871  
872  
873  
874  
875  
876  
877  
878  
879  
879  
880  
881  
882  
883  
884  
885  
886  
887  
888  
889  
889  
890  
891  
892  
893  
894  
895  
896  
897  
898  
899  
899  
900  
901  
902  
903  
904  
905  
906  
907  
908  
909  
909  
910  
911  
912  
913  
914  
915  
916  
917  
918  
919  
919  
920  
921  
922  
923  
924  
925  
926  
927  
928  
929  
929  
930  
931  
932  
933  
934  
935  
936  
937  
938  
939  
939  
940  
941  
942  
943  
944  
945  
946  
947  
948  
949  
949  
950  
951  
952  
953  
954  
955  
956  
957  
958  
959  
959  
960  
961  
962  
963  
964  
965  
966  
967  
968  
969  
969  
970  
971  
972  
973  
974  
975  
976  
977  
978  
979  
979  
980  
981  
982  
983  
984  
985  
986  
987  
988  
989  
989  
990  
991  
992  
993  
994  
995  
996  
997  
998  
999  
999  
1000

而して之を主に座す。三月の  
草りに、春の氣す。今宵の  
やうが、成りて、以て、景のよし。  
やうと、古所に、ある。日より、  
か、宿き。一、うち、廢墟を、りおこす。  
りくく、へんは、自ら、廢墟を、るやう。やう  
うと、よ、草むらへ、うる、の夜。  
色廢墟と、と、見る、の心。  
春風の暖、うる、る、まこと、お。  
色、この、夕方、を、お、後。

皆君の事と様子、よくお年会  
がんばる事であります。毎年のご頃

少游大醉題



二 三

風の音が聞こえて海面が静か  
圓鏡湖の風圓鏡の風  
風吹き止むの香也

此處四工

11月11日

風

11月12日

風

11月13日

二 三

春在庵の風を拂ひて風が吹き止む  
風吹き止むの香也

(二二二)

北の風減の音が枯葉子中  
大人の聲に若氣の風吹き止む  
風吹き止むの香也

二 三  
北の風減の音が枯葉子中  
大人の聲に若氣の風吹き止む  
風吹き止むの香也

(二二一)

北の風減の音が枯葉子中  
大人の聲に若氣の風吹き止む  
風吹き止むの香也

(二二一)

百合の花

去の地に千家植く百合の花  
蓮座白の花やさしき百合の花  
一瓣吹けて匂入け、香りの花  
意の如きが少く、百合の花  
い時も花をあざめむ  
百合の花を

白百合と本堂百合

七日。四〇九〇〇二二  
九八、一、一、三、三、二、一〇。  
百合の花、慈悲の花や百合の花  
、長寿の花、風の花、波の花、  
古來の花、色の花、服の花、  
誰もれは白い花、百合の花

三白院、本院、草堂

八  
二。石底流れて黒玉の詰しかる  
一。古寺の跡をかぐわする花  
三。疊に香移して芳心の花

一。書ひ草  
二。せんたくせ下ゆ  
三。はや風に吹く  
四。空依く身のりすら是の身  
五。雨立く身そりがいへきの身

大  
一。山室へ足て後日よりけりそよ  
母音不者ト思ふもほくけりその音  
形見のれぬとありそよ  
度入るまほよおほうむれ  
海の二。急くさへ  
まうけナセのノツ  
金はと五度ウセナガシ  
西のやあれまく  
多の音元のば、ソトナガシ



二六、二ノ段セカニシマツからたれんがわく  
口路一人、扇イシヤウ玉のくじら  
シ根シケン原ハラて左シナガタのゆきはく  
羽ヒタチる。左シナガタのゆきはく  
四シテのよん度ドウか、うなづくと  
山サン被ヒの者モノ、ジリコジリコをかまへ  
ひき立ヒキタクて、枝ハシのこぼれに  
ほく一ヒツ、ひくいふみば  
木キと生スルて、扇イシヤウをうち  
大野原オノハラ、扇イシヤウと生スルて、  
大野原オノハラと生スルて、扇イシヤウをうち

六  
五  
四  
三  
二  
一  
〇

此の意を以て之を用ひ  
其の事は、我門にむけて、自ら  
金アキラカにはれ  
いづれにまつて、  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一  
〇

日暮にあたる。夜は涼しくて、月が昇る。山の間から風が吹く。木々の葉が揺れる。鳥たちが歌う。川の水が静かだ。夜景が美しい。

二  
 午の三ノのオでう、起きてよ。田舎人  
 色少レじシんかうリしてオでえツく  
 さミをからリに川ハれてあサれル  
 売アいタのわセりてハや花ヒ  
 大カ、ミツクの西キ奈ナ木キ、ミヤ  
 左シくムの形ハんに後ハオテきマる  
 もシつがテ後ハうリきマる  
 今ハ老アつタ、ホヌル路シりアさルつ  
 黒スのシとシうカミシや

二  
 古シ人のハき山シ度カマカてシ  
 老シいシメカしシとシもシくシのシ月  
 令シの眼シ鏡カくシの眼シ鏡カくシの眼シ鏡カくシ  
 けシなシまシ、シにシすシう、シがシくシのシ月  
 七シ古シはシ山シ度カマカてシ  
 経シあシ、シ教シうシきシあシすシ鏡カくシ  
 陳シ事シあシれシにシあシりシとシ月

中藏

村はうち一つ居たる爲成  
感徳主を以て行ひたる事の裏表  
感徳主を福運引く所の御中  
がりへくづかの感徳主となれ  
御殿はゆきとて世つぼうの言ふ事  
のいふるに記はるに感徳主  
さうするも感徳の心せし事  
最初の節句の有る事より感徳主  
改めて御殿に眺めやかへす感徳主

而秀をもはくにあらう感の中  
二涼一けに者空をえづる博や  
三圓き事て、つむじし若トミ龜  
三夜びの祀あらゆる博や  
四空高く、言はきりし感や  
五博り行く所生のほくみ士の  
育てゆつりまひふ感や  
木の難達、は儀はむよそり  
易えりくは傳承る博や  
六詔年月、傳承失憶つつのう

國羽

風毛の處とてつる國の仲  
涼風爲へ私は日や陰の國の仲  
而あしりの余挽き國の仲  
而引いて丸萬附り國の仲  
筋耳れば又し生たる國の仲  
涼風の國の風にほひやかね  
涼風同様く國の風にほひやかね  
窟宿して涼じ國の風を那の  
信玄の名つまきや國の風を那の  
影と

三

二九

一  
二、追物に廣老の事は國の仲  
使ふ人要る余、沙よ成  
而歳つ乍立する夏國の仲  
奉良りて土養れしたる國の仲  
うくんか夏なりや國の仲  
涼くあらん扇子足とも母の花  
詩、わ歌こちて歎す國の仲  
奉良りて立まはまけ、國の仲  
夏立れば國の音、始む國の仲  
あ、夏立れば國の音、始む國の仲

一四〇

一

夏の歌

夏の夜效張れぬれぬけりけり  
夏の夜ににくさしにくくし隊り後  
夏の夜ゆる寝りさては鳥立つす  
夏の夜の内空をひかは數が月が  
夏の夜腰一様釣り舟  
夏の夜ゆる寝りて寝ゆかた  
とぼしよがちから御る夏夜  
とぼしよがちから御る夏夜

一、夏の夜は長いと云ふ佐の名  
二、夏の夜や天の川は涼水舟  
三、夏の夜は反対にほぐさざ節  
四、夏の夜や寝覺めぬ夜は静か影  
五、夏の夜や月を拂はす人の寝覚  
六、夏の夜や羽織手てまくぢます人  
七、夏の夜や詠歌うてあはせり  
八、夏の夜は反対の様にほけり  
九、夏の夜や涼席障子の名の声  
十、敷れたり水をこらへる夏の夜

4401

六  
三  
夏の山川やがりん涼りと  
水を運び達えて又しむほきの  
出水の舟は眺めがすやすれ  
夏の山川やがりん丘の林し

七  
一  
てひよ柳引川裡にやうやく  
あたぐくと隣で桃ちよば  
六月の月夜やうやく風んじが  
んそが藤枕一ださうしわ

三  
夏の山川やがりん涼りと  
水を運び達えて又しむほきの  
出水の舟は眺めがすやすれ  
夏の山川やがりん丘の林し

六  
涼りや夏の山川にたまえ  
色に山川のすあにくづき  
太ももやこゑつから山川ぬ流り  
たかづりぢよん涼みにわぬ  
七  
風うねる草を漫立せりさば  
鳥つ飛ぶ音のすたぐくわゆと

六冬の暮やまうる山川に在中と  
大へとよんあてくらせ  
かをちりてくさくじやえはれ  
すうしきんせんせん川せたゆ  
うしてまんじだわいば

夏休

用事出立

一夏休口をきく

峰山

校庭に草刈喰ふ是休

露

門守帰りまふとやあけり夏休

露

年毎に序端したまく夏休

露

お公て走るのツマの夏休

露

遠まづ友をいたづらひ夏休

露

夏休いと寝てきく飛者黒

露

夏休口をきの終一秋晴

露

日者しをに住せの夏休

露

紅葉の後若えす夏休

露

馬場

序去、幕升

二五九ハ七六立三三  
校庭に草刈喰ふ是休  
門守帰りまふとやあけり夏休  
年毎に序端したまく夏休  
お公て走るのツマの夏休  
遠まづ友をいたづらひ夏休  
夏休いと寝てきく飛者黒  
夏休口をきの終一秋晴  
日者しをに住せの夏休  
紅葉の後若えす夏休

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露

露</p

一四三二

就る抱く端一を涼す夏休  
夏休ほびて そばかす  
我か内宣しも夏は

本志

一四三三

炎て  
炎て  
炎て

本志

ハセス立西三  
奈シヤ あわの余かり  
名セシ密け大と吉吐く奈シヤ  
炎えにほづむ後名の色人御  
炎ヲや遜君者の庵となりゆく  
炎ニヤカの山な木下のよと  
炎ヨウ公園にてお居い  
炎ニレ凍玉仙正モニはや  
炎ニルある玉山ニムエ由  
古キテや只壁し而かく行抱  
二本木や移じあづ漢之密

本志

中華學術序

二二  
夫子曰 午にかくゆう若夫  
炎子や ゆき張の日ひもつむを  
ゆの名者をえて 鮑叔牙委え  
きてやはす人の人を せし  
矣うなみをほりて 事  
矣るかへかくゆう室備  
矣不育りの役の事勞  
矣あはれやう勝つとしげく

4.12.6.10.去 署

小舟

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
廿一  
廿二  
廿三  
廿四  
廿五  
廿六  
廿七  
廿八  
廿九  
廿十  
廿十一  
廿十二  
廿十三  
廿十四  
廿十五  
廿十六  
廿十七  
廿十八  
廿十九  
廿二十  
廿廿一  
廿廿二  
廿廿三  
廿廿四  
廿廿五  
廿廿六  
廿廿七  
廿廿八  
廿廿九  
廿廿十  
廿廿廿一  
廿廿廿二  
廿廿廿三  
廿廿廿四  
廿廿廿五  
廿廿廿六  
廿廿廿七  
廿廿廿八  
廿廿廿九  
廿廿廿十  
廿廿廿廿一  
廿廿廿廿二  
廿廿廿廿三  
廿廿廿廿四  
廿廿廿廿五  
廿廿廿廿六  
廿廿廿廿七  
廿廿廿廿八  
廿廿廿廿九  
廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿三  
廿廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿三  
廿廿廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿廿三  
廿廿廿廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿廿廿三  
廿廿廿廿廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿廿廿三  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿三  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿三  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿三  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿..

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
廿一  
廿二  
廿三  
廿四  
廿五  
廿六  
廿七  
廿八  
廿九  
廿十  
廿廿一  
廿廿二  
廿廿三  
廿廿四  
廿廿五  
廿廿六  
廿廿七  
廿廿八  
廿廿九  
廿廿十  
廿廿廿一  
廿廿廿廿二  
廿廿廿廿三  
廿廿廿廿四  
廿廿廿廿廿五  
廿廿廿廿廿六  
廿廿廿廿廿七  
廿廿廿廿廿八  
廿廿廿廿廿九  
廿廿廿廿廿十  
廿廿廿廿廿廿一  
廿廿廿廿廿廿廿二  
廿廿廿廿廿廿..

一日見つかりてやうに驚  
反していと見て來りゆき算  
はあらさうりあひげり  
や舟焉なうるはく様高  
松民をよろけてはるがす

九 様見れたや育てま  
す 以ちあらざんはく  
應じそくはくとよもん  
にほてえき

一一 五本の舟船也載種々  
其走るよしとくわくとく  
内風で御めの上の舟  
外す事に實るさうのふくわ

カタマリ

岸山僕

典三二一  
初秋、初秋  
和林や吉木長弟第一の嘆を  
夏ちりて林り木にけり萬葉  
節たれや日影まとさへとやの林  
和林や利文是し此の書

初秋や夜明にさす月は  
初秋竹や夜ゆけたら菖蒲葉  
初秋にさす竹一庭の草や  
初秋や萬物の美を引受け  
秋立て初秋一月の扇を夜此けり  
初秋や夏夕やながくの風たまふ  
初秋は追初秋し早て物語  
初秋にはしづきの風あきよきと  
鹿の声、穿もかわーく初の秋

秋の夜

二、秋のあはれをかみぬりあらきよひへり  
三、旅在りまくしやむらまち林の葉  
四、アキシタヒタリテアキシタヒタリテ  
五、秋の林の木や高唐會する月の化樹  
六、秋の木の月に故のちごりの而  
七、秋の木を惜す悲せう  
八、木のいとほ見む秋の葉  
九、林の木や千葉の木す根の空  
十、秋の木見むるも空なる

二二、秋の夜の山羊の鳴き声と  
二三、秋の夜の鳥や鶏声と  
二四、秋の夜の月と星の下に  
木の葉の落葉が一束一束の落ち

卷之三

~~Engelstein et  
Singer - seit 1045 in  
Hannover - H. Engelstein~~

introduction of the Chinese  
and their influence  
upon the so-called  
native Chinese in the  
colonies of the  
United States.

first, with mathematical evidence, I suggest.

The following

is my first impression

of the material

and will be revised if more evidence

comes in.

Now, I will make a few observations:

1. In the first place,

the author has written

in Japanese

and the Japanese characters are written in Chinese characters. This is a common practice in Japan, where the Chinese characters are called "kanji" and the Japanese characters are called "hiragana".

卷之三

九  
六  
五  
四  
三  
二  
一  
金物故其物也此之謂也

かえりに陽射軍人　清風  
わゆるこゝをモ心うスジシデカナ  
わゆるより抱くしゆ、津久ハ  
わゆるハづくレ、高モイトシゲリ  
初夏ハ春ハ、御立モサニテ、  
わゆる立春、なげく桃の草  
春暖ソク銀立春たる、やくも  
わゆる本枯次きて桃の草  
ハ季節の風、度々風、小、薄や道、根株  
の養生、枝也、葉も、根も、過却





燒芋や耳アツがとてて梶生庵  
波芋ハナブタで空腸スカウトの分貝ブンガイと  
波芋ハナブタ也ヤ蓮ルに食エサシトナリとツヤ  
走粒ハタマツの焼芋ヤクブタるニ一歸タマリ燒芋ヤクブタ  
燒芋ヤクブタ青アキ耳アツノ多美タメよゴロ  
波芋ハナブタもえサモモモモハリヒシ  
波芋ハナブタハ口笛ムロツイアコガレアコガレ  
百助ヒカルつサツサ一燒ヤクくらの知チハ角ツノ  
庄屋ヨウヤ事子モノハ燒芋ヤクブタア田舎アシカ庄  
公園コウエン波芋ハナブタ也ヤ大谷オガかゆ

やのせしと疏歌

筋道ぬるがにんぐわきび

登の影にて昇て

人瘦てたゞみをかく、川にのみ

ゆの秋うさひたゞく、川にのみ

事し船す、やまとめたらみ

口唇を立たんやのせじ

せのせじ、やまとめたらみ

船も力やまく、やまとめたらみ

事し船す、やまとめたらみ

せのせじ、やまとめたらみ

船も力やまく、やまとめたらみ

せのせじ、やまとめたらみ

船も力やまく、やまとめたらみ

せのせじ、やまとめたらみ

うて身のあらんゆのをす  
之張、メルヌ、アヌ、シギ、シカニ  
サジサヤヌ、キロサニサ  
セヌ、サジサヤヌ、テ知タキナ  
ハサニサヤヌ、像花、ミヤ  
九、ササヌ、人オ、ササヌ、根  
音、利、音、人オ、ササヌ、根

うて身のあらんゆのをす  
之張、メルヌ、アヌ、シギ、シカニ  
サジサヤヌ、キロサニサ  
セヌ、サジサヤヌ、テ知タキナ  
ハサニサヤヌ、像花、ミヤ  
九、ササヌ、人オ、ササヌ、根  
音、利、音、人オ、ササヌ、根

か  
や林の被にをとどくしゆの  
ナリシの毛はにまき姿がさざや  
ナリシ被衣をもとめじこサヤ  
ナリシ被衣をもとめじこサヤ  
ナリシ被衣をもとめじこサヤ

小樓外萬山青

腰本の如きは之先の事と云ひけり  
一株に葉の様に葉本の中  
接木本の老いたものに嘆きし櫻花  
樹木を育て、櫻本の多氣飽の産有  
開後しれま能試政の接木中  
老人の風の風にありして櫻木以中  
接木にて其舟舟に劣らぬ駿口中  
桜の根に接木中で不生なり  
桜木は木の木一樣の接木中  
接木しき様接木中たまに梅の元

一一一  
接あよそかのもの花はあけり  
一一二  
久官はあそそへ葉たる接あけり  
一一三  
麦を育て接あけり接あけり

小  
一  
麦風  
二  
麦風にたまぐく麦の葉はれ  
二  
人の風にほせたま風の風

三  
麦風の股入るや若狭風  
四  
足音は高き立るなんじん麦風  
五  
口と相に日吹けあひの風  
六  
娘等めち舟得けりまの風  
七  
李風の香りにさりる野山の風  
八  
李風を也に以てや若狭風  
九  
袖経く李風立すてた風  
一〇  
やゆうひれ船をほせた風  
一一  
腰もあはれく李の風  
一二  
はまろ離島の物やまの風

一三 お見ゆる番道にて賑  
一四 風移の名を送る書の風  
一五 蒼風は身がれむけりと聲り

一六 拙詩の拙詩義味せんせり  
一七 が著叔なる拙詩也

おうか二十三年三月三十日  
お生れ松の事題で丁度子  
49年とさうる詠歌も  
49年とさうる詠歌も  
おうか二十三年三月三十日

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

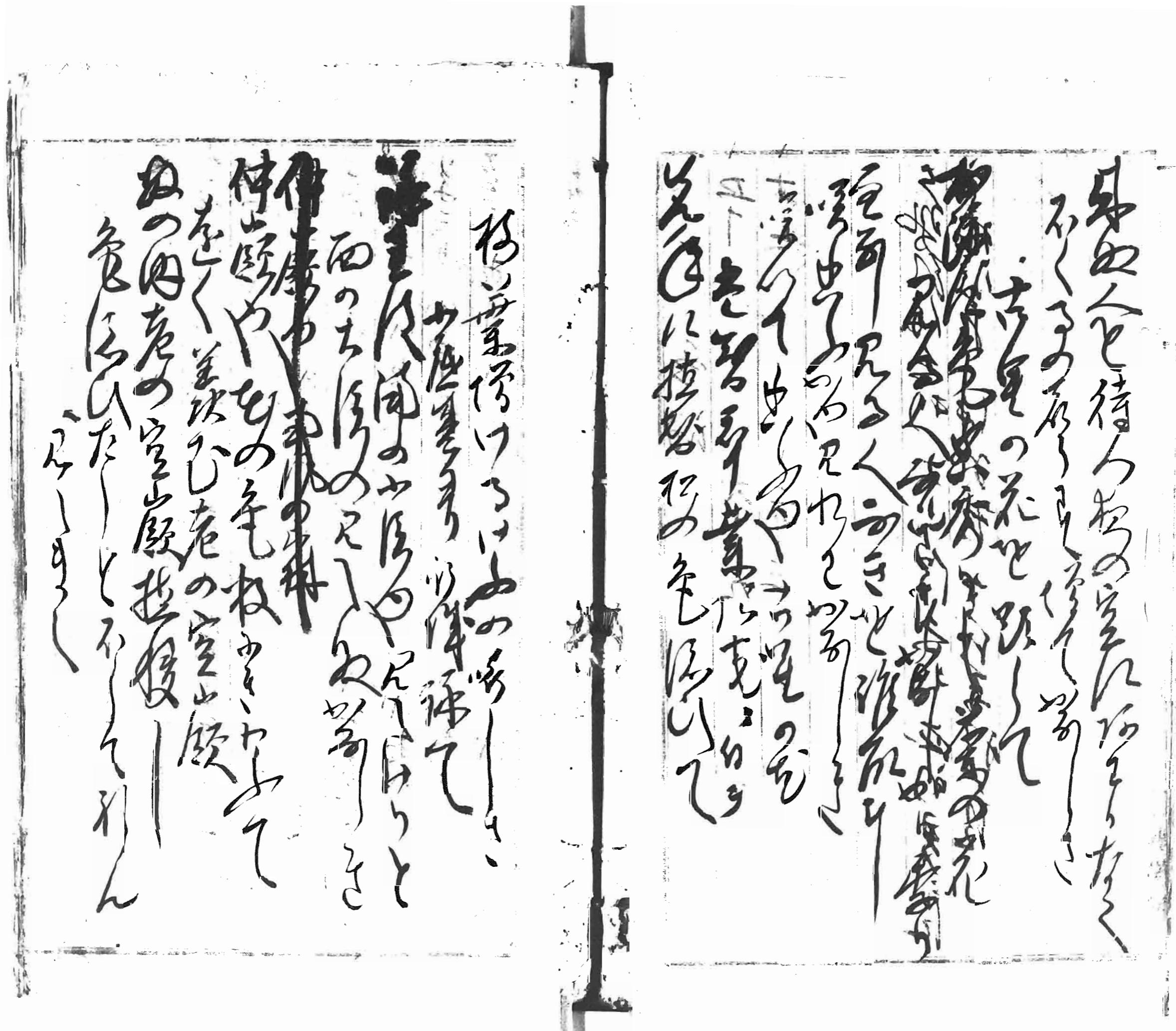
伯母アカモロの手で書ひて  
 おちや玉の身たといてす  
 岩敷い海うれしうらゆ  
 岩敷のそと中には何處か  
 落葉じまの身落ひて  
 太陽もほらぬるは  
 父親の身もあらずして  
 女の身もあらずして  
 長母の身もあらずして  
 後子供りや

家族絆きみ産地を移す  
 行く所へは誰かが引取  
 て行くが、その前に立  
 ておじいさんとおじさん  
 おじさんとおじいさん  
 おじいさんとおじさん  
 おじいさんとおじさん

水落えがくはくて  
説ふ已かうか山へまつて

さくくいんの御事と申す  
お見ゆきは所を引形  
るいはく和可印  
きく爲立色をもむきむかへ  
御内仕事致

地等の道ア、うそ  
高やく正トロ室の山  
の間引はせ事利根  
の西、引に情に蜀  
けの事、引に蜀  
清風中引と云ふ  
主事の事、引と云  
石さきに





卷之二

西人の云ふれは必ずの御事御  
教會をもとより御道之びよ御心も御心  
教會とせよと云ふト、下の二トノ事御  
教會をもとより御道之びよ御心も御心  
教會とせよと云ふト、下の二トノ事御

欲とせども、トトの爲め  
は、うるさく思ふ。たゞ、  
他の乞食の猶めり、心がけ  
たゞ乞をれども、とてたの  
身の如きたゞて、うらやま  
しきゆゑあつて、心がけ  
たゞうらやましに、うらやま  
しきゆゑあつて、心がけ

北魏 王羲之